

古教照心、(こきょうしょうしん)・・・古い教えに心が照らされるということ。

令和4年度6月28日於加茂法話会

古教照心」と云う事でお話をさせて頂きます。古(いにしえ)の教えを心(こころ)に照らす。

古(いにしえ)の教えとは、お釈迦様の教えの事です。心に照らすとは、お釈迦様の教えを慕って、心、つまり(いのち)を生かしていく事です。すると、どうなるか。お釈迦様の教えに随ってゆくと心が元気になる。

お釈迦様は、命の儂(はかな)さを感じられ、命の大切さを私達に示された。つまり、命の使い方を私達に示されたのです。命の使い方を勉強するのが仏教です。その仏教の教えを身に付けていく人々を菩薩といいます。そして、大切なのは、人から人へと伝えて行くことです、人間形成してゆく道ですから、仏道といえます。

心(いのち)が、古(いにしえ)の教え、一仏両祖の教えを照らすような生き方をする、

その生き方を「古教照心、(こきょうしょうしん)」と言います。

昭和56年春に大本山永平寺で修行させて頂きました。まれにみる大雪で如意庵に夕方に着し、永平寺での修行の身支度をしてもらい、翌朝4キロの道のりを雪の壁の中歩いて山門に到着、木の板を3回たたきます、山門の脇に掛かっている木版を木槌で〇度打ちます。これが到着の合図なのです。2メートル以上の雪の中、2時間ほどすると、新しい修行僧を指導する雲水、お坊さんが、「何のために永平寺に修行に来たのか、と尋ねます。」私は「道元禅師様の仏法を身に着けるために来ました」と答えると指導する雲水は立ち去り、昼近くに、先ほどの指導するお坊さんが来て、「同じことを問いかけます」私も「同じ答えをしました」とすると、山門に書かれた左右の聯に書かれた漢文を読めというのです、

山門の右側には「家庭巖峻 不容陸老徒真門入」(かていげんしゅんりくろうのしんもんよりいるをゆるさず)、左に「鎖鑰放閑 遮莫善財進一步来」(さやくほうかん、さもあらばあれ、ぜんざいのいっぽをすすめきたるに)。

慈しみのこころを持っていきることをお釈迦様は説かれています。

道元禅師様は、「修行僧はすべて、互いに父母であり、兄弟であり、親族であり、師僧であり、善智識であるという慈悲・親密のこころをもって、互いに慈しみ愛し合い、自分から他の人を顧みて同情の念をよせ、よき友をえて仏祖の正法を行ずることは世にもめぐり合い難いことであると、必ず合和和睦の顔(かんげせ)を見ん。つまり、感謝の念をいけば、必ずや自然にこころもなごみ邪念も消えて、にこにこした顔を見あうことができるのである。」と強調されています。

瑩山禅師は、1320年頃、瑩山禅師様は洞谷山尽未来際置文に「たとい難値難遇なんちなんぐうの事有るも、必ず合和和睦の思いを生ずべし」と示され、人びとの悲しみも苦悩も我が事のように受け止め、相和あいわして生きることをお説きです。この時、私たちはさまざまな立場を認め合いながら、寛容になれるのです。

誰も見ていないと思っても、自分が気付かないだけ、

水は掴む物ではなく 水は掬うものです。

心も掴む物ではなく 心は受け取るものです。

なさが 行為になったとき、心が生きる

心が生きる事は 人と人の絆が生まれたこと

絆があつてはじめて人間は生きることが出来る。